

無雙神傳英信流抜刀兵法 大石神影流劔術 澁川一流柔術
貫 汪 館 会 報

貫汪館支部：横浜、名古屋西、北大阪、呉中央、久留米、フランス、オーストラリア、ロンドン

貫汪館 名古屋講習会（試合口・太刀打）

平成28年9月10日（土）、森本館長と横浜支部長にお越し頂き、名古屋西支部で初めての講習会が開催されました。

当日は暑さも厳しく、冷房のない体育館でしたので熱中症に注意しながら行いましたが、事故もなく無事に終了することが出来ました。

今回の講習は劔術を中心としたもので、午前中は大石神影流劔術の構えと試合口、午後は無雙神傳英信流抜刀兵法の太刀打の稽古を行いました。

構えの稽古では真劔(中段)と上段を徹底的に指導して頂きました。手の内から始まり、体の捻じれや歪み、鼠径部の緩み、肚から動くことなど、一つ一つ丁寧に教えて頂きました。これらはいつも基本として教わっている大事なことであるのに、まだまだ求められているレベルに達していないことを痛感し、求める態度が不十分であったことを反省致しました。

試合口の稽古では細かい部分まで説明して頂き、手数に対する理解を深めることが出来ました。

お昼に休憩をはさみ、午後には一般の方にもご参加頂いて、太刀打を稽古しました。太刀打の稽古でも細かい部分まで指導して頂き、特に形の裏にある理屈、相手がこう動くため自分がこう動くということを説明して頂きました。その中で、やはり独りよがり動くのではなく、相手と調和することが大事であると実感致しました。

今回は暑い中長時間の稽古となり大変でしたが、各人学ぶことが多く充実したものであったと思います。これからの稽古を通して、この講習会で学んだことを深く求めていきたいと思います。

最後に、指導して下さった先生方に御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

名古屋西支部 鈴木 亨昇

貫汪館 名古屋講習会（試合口・太刀打）



貫汪館 本部講習会（大石神影流剣術）

「大石神影流剣術講習会」に参加して

10月8日から10月10日までの三日間、本部道場において、大石神影流剣術の講習会が開催されました。

初日は大石神影流剣術の構えからですが、まずは真剣、所謂中段の構えです。基本の基である構えには時間をかけ、大切なのは鼠蹊部が緩み、重心が落ちていること、太刀を持つということは自然に半身になることですが、真剣に構えた時も、自然な無理のない半身であること、しかし正中線は肚を通り地に至り、太刀は肚に納まり、肚からの気は太刀を通し切先から相手に向いていることが大切です。真剣から、上段、付けという大石神影流剣術独特の構えに移行する際も肚である臍下丹田が動く（回る）ことにより太刀の切先は自然な円を描きます。上段や付けの構えを取るのではなく、自然に太刀は上段や付けの構えに納まるのです。

基本となる試合口では、一心・無明一刀では、打太刀の刀を受け「張る」という大切な動きがあります。これも単に腕だけの動きでは効果はなく切先が相手から離れてしまい次の突く動作に繋げることができません。肚が繋がった動きであればこそ張り、そして突くという流れを生むことができるのです。

基本である試合口から陽之表・陽之裏と続きますが、やはり肚がしっかり落ち着いて力の源となっていることが重要です。

構えを作り居ついてしまう、手順を追うだけで切り込んだ状態を自ら作り上げてしまうのではなく、打太刀との攻防の中で自然にあるべき構えとなる。体が自然に流れるためには、足で地を蹴るのではなく、鼠蹊部が緩むことで自然に体が前へ後ろへと動けることを知らされます。

二日目は、三学圓之太刀・二刀・小太刀ですが、ここからは未体験の領域で、どうしても手順を覚えようとして、攻防の動きに眼をこらすばかりで、結局、自分の構え方も頼りなくぎこちない動きしかできません。

二刀になると構え方からしてあやしい状態で、小太刀に至っては打太刀に逆に押し込まれ、まったく情けない限りです。二刀・小太刀も打太刀の起りをとらえて、自分が動かないと攻防の技とはなりません。相手の気を感じて合わせるということが重要となるのです。特に小太刀は、勇気をもって前に踏み出すこと

が大切で、手数 of 奥深さ難しさをあらためて悟られます。

最終日は、鎗合・長刀合・棒合など、さらに未知なる領域へととなります。

鎗合については、鎗を目の前にして相対すると、その長さで槍先を奪われ、勇気をもって飛び込むことができず、飛び込めて槍の懐に入れたとしても、受けから腕だけの手先の張りになってしまい自分の剣先をあらぬ方向に向けてバランスも崩れて、なかなか理のある攻防となりません。

基本的に小太刀と同様に相手より短い刀であれば、踏み込み飛び込む、相手の懐に入らねば勝機はありません。それゆえ相手の気を読み勇気をもって踏み込む、また槍を太刀で受け張るわけですが、この張る動作も大石神影流剣術の基本である試合口の一心・無明一刀の張る動作そのまま、この張る動作であればこそ、相手の槍先を落とし、切り込むことができるのです。

さらに防具をつけての稽古を行いました。現代の剣道が、剣先を当て打ち込むという動作に特化したのに対し、相手を切る切り込むためにはどうあるべきか比較させられ、本来の防具稽古のあり方を学ぶことができました。

三日間の講習で、大石神影流剣術の手数のうち天狗抄と神傳載相以外をすべて網羅したわけですが、短い期間ですが内容のこもった稽古で、館長の繊細で的確な導きと横浜支部長、名古屋西支部長の温かい指導に感謝するところです。

追記ですが、講習会では小太刀を館長からお借りしていたため、自分の小太刀作製を決意、古い木刀を活用して、切先部分は懐剣に、切断した途中を削って切先を作り、鞘も市販の鞘を組み合わせ、my小太刀を完成させました。

本部道場 定木 秀早



明治神宮奉納 日本古武道大会

11月3日(木・祝)、日本古武道振興会主催「明治神宮奉納 日本古武道大会」に参加致しました。

明治神宮西参道芝地にて50以上の流派が一堂に会する毎年恒例の演武会で、貫汪館は無雙神傳英信流抜刀兵法、澁川一流柔術の二流派を演武しています。今年は森本館長、横浜支部長、名古屋西支部長が演武致しました。

芝地での演武ですので、朝方の雨の影響を心配致しましたが、素晴らしい快晴のお陰で地面もすぐに乾いていき、有り難いことに演武の際にはまったく支障はありませんでした。

無雙神傳英信流抜刀兵法は「英信流表」と「奥居合」を三人で、澁川一流柔術は「半棒」を館長と私、「刀と棒」および「三尺棒」を館長と横浜支部長が演武致しました。

大きな失敗こそありませんでしたが、しっかりした演武をしようと思うあまり、頭で考えながらの演武になってしまっていたように思います。館長からも全く気迫が伴っていなかったとご指摘を頂戴致しました。御神前では己を飾らず作らず、いま出来る全てを素直にお見せするべきと思いつつも至らぬ演武でした。毎度のことながら自身の未熟を痛感致します。今回の反省を次の糧に出来ればと思います。

これまでずっと見学させて頂いていた大会に今年初めて参加することができ、大変感慨深いものがあります。お声掛けくださった館長には大変感謝致しております。また、このような大きな行事は多くの方々のご協力なくしては成り立たないものだと思います。開催にあたりご尽力された全ての皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

名古屋西支部長 林 大介



柳生新陰流×大石神影流コラボイベント（講演&奉納演武）

11月5日(土)、館長のお供で佐賀県小城市まで行って参りました。都合により日帰りです。早朝4時に起床して、バスで羽田空港へ。始発の飛行機で佐賀空港へ。バスで佐賀駅へ、JRで小城駅へ。

館長と合流して、古民家カフェ～Gallery&Cafe 小城鍋島家 Ten～へ。美味しいランチにコーヒーとデザートをいただきました。

紋付き袴に着替えて、会場へ移動します。

講演の会場は、桜城館2階の会議室です。

「柳生新陰流と小城藩主」 剣道範士八段 三宮一宏

「大石神影流と小城」 貫汪館 館長 森本邦生

貴重なお話をうかがうことができました。

奉納演武の会場は、岡山神社です。

正式参拝でお祓いをしてもらい、玉串奉奠。木刀、脇差、居合刀もお祓いをしていただくことができました。

演武会場は、砂利がきれいに整地された境内でした。雪駄を脱いで、白足袋で演武。陽之表、二刀、小太刀は木刀で演武して、鞘ノ内は真剣に持ち替えま

した。幸い、足元が滑るようなこともなく、大きな失敗もなく無事に終わることができました。それにしても、満足の行く演武というのはできないものですね。もっともっと稽古を積みねばと痛感いたしました。

演武終了後は全員で記念撮影をしました。

ふたたび小城鍋島家Tenへ。急いで着替え。時間がなくてコーヒーもいただけず、あわただしくして大変失礼をいたしました。

最終便の飛行機で、なんとか10時30分に帰宅することができました。

横浜支部長 内住 信之



広島城 二の丸夜会「日本刀と武道」～居合・剣術の魅力

11月11日(金) 広島城二の丸において広島城主催、二の丸夜会「日本刀と武道」～居合・剣術の魅力が開催されました。

広島市内もここ一週間でかなり朝晩は冷え込むようになり、前日には冷たい雨が降っていました。しかし、当日は前日までと打って変わって天候も回復、気温も上昇し寒さもやわらぎました。平日の夜ということもあり、どのくらいの方に来ていただけるのか？という心配もありましたが、会場準備のため出入りをしている私たちに何人もの方から声をかけていただき、関心の高さが伺えました。開催30分前にはかなりの方が来場され、最終的には70名近くの方が来場されることになりました。

第一部は講演会です。

森本館長によるパワーポイントを使用しての講演は「武術の分類」に始まり、「居合・剣術の位置づけ」、「広島藩で行われていた武術」に続きます。武道・武術に詳しくない方にも理解しやすい内容でありながら、普段稽古をしている私達にもとても参考になる講演でした。

第二部は演武です。

まずは横浜支部長と本部門人による無雙神伝英信流抜刀兵法の大森流、森本館長と本部門人による大石神影流剣術の鞘ノ内、森本館長による澁川一流柔術の居合（抜刀術）と貫汪館で学ぶ三流派に伝わる「居合」が披露されました。

同じ「居合」でも趣の異なる三流派の「居合」を比べてみることもできる、とても興味深い内容でした。

続いて、森本館長と横浜支部長、本部門人による大石神影流剣術の陽之表、そして森本館長と横浜支部長による大石神影流剣術の二刀、小太刀の演武。

こちらは一人で攻防を想定して行う先ほどの居合と異なり、二人一組になり、打太刀と仕太刀に別れ攻防を繰り返すものです。会場が手狭だったこともあり、動きを制限されての演武となりましたが、森本館長と横浜支部長による二刀、小太刀の演武は普段稽古をしている私達も息を呑む迫力でした。

ここまでで演武は終了。大石神影流剣術の体験に移ります。館長が会場の皆さんにお声かけすると用意した木刀が次々に参加者の皆さんに手に渡りあっという間に定員の20名に。参加者の皆さんを見ると三分の二以上が女性です。後ほど館長に伺ったお話では他の演武会でも積極的に参加されるのは男性より女性が多いのだそうです。

まずは大石神影流剣術の構え。真剣、上段、付け、車と続きます。左右逆になってしまう人もいましたが、皆さん、真剣な眼差しで取り組んでいます。次は大石神影流剣術の手数（形）試合口です。館長のときにはユーモアを交えた指導のおかげで皆さん、リラックスして取り組むことができている様子。試合口4本を終えて本日の演武と体験は終了となりました。会場を後にする皆さんの満足そうな表情がとても印象的でした。

今回、私は初めて演武会に参加させていただき、無雙神伝英信流抜刀兵法の大森流、大石神影流剣術の鞘ノ内、陽之表を演武させていただきました。非常に拙い演武となってしまいましたが、不思議と緊張はしませんでした（普段の稽古で館長に直接指導されている時の方が緊張している気がします）。

最後に今回の会を主催された広島城の皆様、お声をかけていただいた森本館長、遠路駆けつけていただいた内住横浜支部長、撮影スタッフをしていただいた三崎先輩に感謝いたします。ありがとうございました。

本部道場 鈴木 厚史



「大石武楽先生の墓参」 & 「大石武楽先生追善少年親善剣道大会」

11月26日(土)大石武楽先生の墓参、11月27日(日)大石武楽先生追善少年親善剣道大会に、館長のお供で参加してまいりました。

場所はいずれも、大石神影流剣術発祥の地である柳川藩(現在は、九州は福岡県の最南端地である大牟田市)です。

通常はそれぞれ別の週に開催されるのですが、今年はたまたま同じ週の土日に連続して開催されました。

墓参では、陽之表(打太刀:館長、仕太刀:横浜支部長)と小太刀(打太刀:横浜支部長、仕太刀:館長)を演武いたしました。

剣道大会では、昨年同様、陽之表(打太刀:館長、仕太刀:横浜支部長)を演武いたしました。

いずれも、館長の相手という大役であり、大石神影流剣術発祥の地での演武であり、そして縁深い皆様と、他ならぬ宗家の眼前での演武です。大変緊張いたしましたでしたが、幸いにも無事に終えることができ、ほっと一安心いたしました。

至らない身ではありますが、それでも多少の進歩はあったようで、皆様からご好評をいただくことができました。これも偏に、日頃からご指導くださっている館長をはじめ、皆様方のお蔭と感謝しています。とくに宗家から直々のご助言は、大変ありがたいことです。

これからも一層の精進を重ねる所存でありますので、今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

横浜支部長 内住 信之



廿日市天満宮奉納演武

平成28年12月18日(日)本部道場主催、廿日市天満宮奉納演武が開催されました。

奉納演武を終えて

高校の恩師である森本先生からお誘いを受け、本年夏に行われた澁川一流柔術講習会から参加させていただきました。それから月平均2回程度の稽古を続けてきましたところ、突如先生から「今度廿日市天満宮での奉納演武に出て下さい。」と告げられ、「はい、分かりました。」と返事をしたものの、たった

数回の稽古しか出ていない自分出来るのだろうか等と不安になりながら、日常生活の空いた時間にイメージトレーニングや職場の道場を使用して一人稽古を行いました。

いざ本番当日を迎え、廿日市天満宮に到着した途端に、『これだけの稽古で完全に出来るわけ無い。出来ないことがあって当たり前だ。先生に教えられたとおり、臍下丹田と鼠蹊部の緩みのみを常に意識してやっていこう。』と考えられたので、緊張が消えました。

そして奉納演武が始まり、私の出番になり、澁川一流柔術の履形5本と大石神影流剣術の試合口5本を行いました。周りの音が一切気にならず、臍下丹田と鼠蹊部の緩みをしっかりと意識し、スムーズに動け、今までの中で一番いい動きが出来たと思っています。これも先生を始め、普段一緒に稽古を行う方々に支えられたからこそ、今回の成功に繋がったのだと思います。

来年は今よりも上達できるよう日々精進していきます。

本部道場 亀井 裕作



Hono-enbu at Hatsukaichi Tenmangu shrine

Anyone familiar with the customs of Japan knows how important the New Year's season is. While some of the activities are designed to welcome the next years and what it brings, perhaps more important is the chance to celebrate the previous. Trips to shrines are undertaken to give thanks for one more year of life and growth. This kind of ritual is an important one and Kan-ou-Kan uses this opportunity at the end of December on a regular basis.

Recently, we took a trip to Hatsukaichi Tenmangu shrine for exactly that. This particular demonstration is conducted at a small shrine at the top of a hill in the heart of our suburb outside Hiroshima city. The shrine itself is a modest yet beautiful place to demonstrate our arts. We performed each of our variety of styles (jujutsu, kenjitsu, and iai) as in many other environments but with a different purpose in mind. Though open for public viewing, this demonstration was not done so much for the masses, but rather for ourselves in the presence of the divine.

An important element for martial arts training is that of introspection; the chance to reflect on the deeper meaning of the art and of ourselves. On this occasion, we demonstrate to give thanks for another year of life while reflecting on its blessings. Our techniques show how much growth we have worked so hard on in the quest to improve as martial artists and as people. This was most apparent in the noticeable growth for our youngest student whose improvement since the last end of year performance has been exceptional. We should all strive to evolve in such ways in the course of a year!

The intent, environment, and action here offered us an excellent opportunity. We all need to make introspection a regular part of our practice as it is vital to transition from repetition to understanding. Reflection on what our arts do and mean will take training to new levels. Once we understand how valuable looking at our growth in the arts is, we can also apply this same principle to all other aspects of our lives. This way of being and living is the true end goal to the martial arts and the meaning of "do" (道).

Let us pray for the chance to return in another year for another opportunity to have another year to reflect upon. And with that year, let us train to live as best we can.

Headquarters dojo; Eric Drummond

